

Title	啄木のアイロニー : その近代的自意識の位置
Author(s)	安東, 璋二
Citation	北海道教育大学紀要. 第一部. A, 人文科学編, 20(1): 17-28
Issue Date	1969-07
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/3961
Rights	

啄木のアイロニー

— その近代的自意識の位置 —

安 東 璋 二

北海道教育大学函館分校国文学研究室

Shôji ANDO: Takuboku; On His Irony

1

啄木の作品や生活には、よく「二重生活」ということばや、それに類似した意識が現われる。たとえば、端的な例として、明治42年12月に『スバル』に発表された『きれぎれに心に浮んだ感じと回想』がある。彼はその一章で、ある医師から聞かされた梅毒の話を、こんな風に書いている。

「人が梅毒に罹ると、その第一期のうちには、自分の体に確かに梅毒の症候のある事を知り、乃至はそれに対する売薬などを服用してゐても、猶、「自分は梅毒患者だ。」とはっきりは思い得ないさうである。さうして見す見す病状を昂進させるやうな事を敢てするものなさうである。

面白い事だと思って聞いた。同じやうに、自分の生活は「二重の生活」だと気が付いてゐながら、我々はそれを統一せねばならぬといふ一大事を考へずにゐる場合が多い。さうして全く疲れ果てて了ふまで、二重三重の生活に何処までも沈んで行く。」

さらに同じ文章の末尾で、彼はこのことばを、もう一度くり返す。

「近頃私は、事々に、第一期の梅毒患者のやうな近代人の心持—特に、我々日本人の不幸なる性情に就いて、苦しく思ふ。—

ああ、頭が少し熱くなって来た。「二重の生活」といふものに対する私の此倦厭の情は、どうしたら^{はつたり}分明と人に解って貰へるだらうか。」

彼がここでいう「二重の生活」は、具体的には、当時文壇の主流であつた自然主義の小説や理論に現われる。たとえば彼は、長谷川天溪の理論をとりあげてつぎのやうにいう。

「謂ふが如く、自然主義者は何の理想も解決も要求せず、在るが儘を在るが儘に見るが故に秋毫も国家の存在と抵触する事がないのならば、其所謂旧道德の虚偽に対して戦つた勇敢な戦も、遂に同じ理由から名の無い戦になりはしないか。従来及び現在の世界を観察するに當つて、道德の性質及び發達を国家といふ組織から分離して考へる事は、極めて明白な誤謬である一寧ろ、日本人に最も特有なる卑怯である。」

この同じ視点から、田山花袋の作物は「或物」を回避した態度、と見られるし、島崎藤村の作品は「精巧なる製図！」に過ぎなくなる。彼は、自然主義作家が、「道德」を「国家」から分離

して人生を描こうとする態度に「日本人に最も特有なる卑怯」を見るのである。これはもちろん自然主義批判を通して、日本人一般に通有な生活意識の矛盾を衝いているのだが、この「第一期の梅毒患者の症候」が、のちの『時代閉塞の現状』できわまる彼の時代批判にそのまま内在拡大してゆく事情は明らかである。「自分の体に確かに梅毒の症状のある事を知り」ながら、「猶自分は梅毒患者だ。とはっきり思ひ得ない」状況は、そこでは「時代閉塞の現状」を認識しながらなお、その当面すべき「敵」の「存在を意識」しない自己矛盾となって現われる。「二重生活」の状況とは、端的に言えば、思想的には国家を無視し、現実的には、その国家に依って生活をす、という状況である¹⁾。

啄木の卓抜した時代批判の原型は、いわばこの「二重生活」観から由来すると考えても不都合はないが、このような視点は、もともと彼に早くから内在する生得的な傾向だったといえる。評家は多く、彼の鋭く適確な評論活動の由来を、とくに明治41年再度の上京後の啄木の生活意識の変革に重点を置いてみるが、たとえば、明治40年3月、彼が『林中書』で、いわば、世評に高い漱石の文明批判を想起させるような、文明批判の視点を見せていること²⁾を考えれば、「時代に没頭しては時代を批評することはできない」(『時代閉塞の現状』)という批評家の資質が、彼にはむしろ生得的のものであった事情を考えてみるべきだろう。

つまり、問題を彼の「二重生活」意識にひき戻してみれば、彼の二重生活観は、それが一方でその自然主義や、強権批判につながりながら、その一方で、それが己れの生につねに付随する意識であったという事情である。

『きれぎれに心に浮んだ感じと回想』の中で、彼が梅毒患者の比喻を借りて、時代の「二重生活」を批判しているのはこの意味で暗示的であり、それは己れの中に、病魔の存在を確信しながら、遂に自分は「肺病患者だ」と認識することを回避してきた不安な彼自身の自意識の実感であったともいえる。しかも彼がこのアイロニーを明瞭に実感するのは、彼が篤い病の床から離れられなくなる最晩年の頃である。

人間の悲しい横着…証拠により、理窟によって、その事の有り得るを知り、乃至は有るを認めながら猶且つそれを苦痛その他の感じとして直接に経験しないうちは、それを切実に信じ得ない、寧ろ信じようとしないう人間の悲しい横着…に就いて、予は入院以来幾回となく考へを費してみた。さうして自分自身に恥ぢた。(「郁雨に与ふ」)

かういふ事は、しかしながら、決して予の病気についてのみではなかったのである。考へれば考へる程、予の半生は殆んどこの悲しい横着の連続であったかの如く見えた。(中略)この近い三年許りの間も、常に自分の思想と実生活の間の矛盾撞着に悩まされながら、猶且つその矛盾撞着が稍大なる一つの悲劇として事実³⁾に現はれて来るまでは、その痛ましき二重生活に対する自分の根本意識を定めかねていたのである。(「同上」)

かって彼の鋭い近代批判の原型をも示唆する「二重生活」観は、いま、返す刀で彼の生活意識の矛盾を切りさいなむ。しかし、このような自己撞着の認識は、彼にとってとくに目新しい、痛切な認識であったというものではあるまい。「二重生活」に甘んずる「我々日本人の不幸なる性情」は、より切実に、その「半生が殆どこの悲しい横着の連続」であった啄木自身のものであった。この啄木の自意識を見逃して、たとえばそこに、「社会主義思想家」あるいは「革命詩人」としての像を、安易に彼の可能像として描くことは危険であろう。いいかえれば、彼の鋭利な時代批判や、思想家的資質が、彼のある種の近代的自意識から由来する事情を考えておく必要は十

分にある。この意味で、浪漫主義の詩人から自然主義、また、その批判を通して社会主義思想に至りつくという発展過程で啄木を捉える通説的な立場は別におき、ここでは、彼の近代的自意識のスタティックな一面に、私なりの考察の主題を見てゆきたいと思う。

註

- 1) たとえば瀬沼茂樹『近代日本文学の構造』I 明治の文学（1963集英社）401p.「石川啄木とその時代」中の一節にもこうある。「思想的に国家を無視し、現実的に国家に生活する<二重の生活>に頭が熱するまでに悩んだのは啄木のすぐれた見識であった。」
- 2) 『林中書』（筑摩書房版「啄木全集」第四巻所収による）100p.「日本が一躍一等国になった！一等国になるとは国が成人して大人並みに交際が出来る様になるといふ事である云々」から日露戦争の勝利が、いかに内容を伴わぬ近代化の一面を露呈するに至ったか、という事情に言及するあたりは、小説「それから」や、講演「現代日本の開化」に現われる漱石の、外発的な明治文化の矛盾をつく論旨に近似する発想が目につく。

2

啄木の作品や生活に、いわゆる「二重生活」的発想や意識が、暗示的に現われる事情については、前章でも一言したが、もっと具体的にいえば、彼の生涯にはつねに相剋し、撞着する二元的な世界があったということが出来る。それは一方で彼の貧困な生活にやむなく介在してくる矛盾であり、だが一方で、それは彼の性格そのものの、複雑な撞着性である。

私自身が現在に於て意のままに改め得るもの、改め得べきものは、僅かにこの机の上の置時計や硯箱やインキ壺の位置と、それから歌ぐらゐるものである。さうして他の真に不便を感じさせ、苦痛を感じさせるいろいろの事に対しては、一指をも加へることが出来ないではないか。否、それに忍従し、それに屈伏して、惨ましき二重の生活を続けて行く外に此の世に生きる方法を有たないのではないか。自分でも色々自分に弁解しては見るものの、私の生活は矢張現在の家族制度、階級制度、資本制度、知識売買制度の犠牲である。（「歌のいろいろ」）

ここで啄木の意識を「惨まし」とらえる「二重の生活」は、主に生活の外在的な悪条件から来る。その日のパンにもことかく貧困生活の人間が、それよりはまだマシな一般の人間達の二重生活を批判し、「明日の考察」を説くことはこっけいといえ、こっけいである。このアイロニーは、『歌のいろいろ』を書く明治43年の暮れ頃から愈々生活に追いつめられる身となって、さすがに楽天的な啄木の心を痛切にひき裂くが、しかし、この二重生活は、結局のところ、「現在の家族制度、資本制度、知識売買制度の犠牲」というかたちで自得される。この地点では「歌は私の悲しき玩具である」という自嘲が、一方では『時代閉塞の現状』を書かせる精神のハリと、相矛盾するようで、むしろ相関的な調和を示すのである。二重生活のアイロニーをもたらすものの原因が、外部にあるうちは、啄木の絶望には、しかし、まだ「明日の考察」を望み、主張しうる理由も意味もある。しかし、彼の「二重生活」は、一概に、「現在の家族制度、資本制度、知識売買制度の犠牲」の上だけに強いられた、生活の条件であつたらうか。啄木の「二重生活」のアイロニーは、そう言いきってしまうには、もう少し複雑であつたということではできまいか。たとえば、それとは別に、つぎのような自嘲の姿勢が、彼には早くからある。

それは私は種々な事を為て来た。が、それが一つとして私の利益になった例は無い。遣り出す時は随分一心になって遣る。今度こそはと言った様な意気込で、それこそ夜目の寝ずに遣る。さうした結果は、屹度遣り過した、でなければ倦きて了ふ。私には一本調子に自分の為事を守って行くといふ事は出来ないのだ。（中略）取附から私は破綻の種を蒔いてゐた様なものだ。（「一握の砂」）

大した抱負でもある様に人にも言い日記にも書いたが、それは真赤な嘘、さうした間際にも私は自分を欺かずに生きてゐれなかつたのだ。(同上)

私には才がある、悲しい哉才だけはある。然し真箇^{ほんとう}の作物は才だけでは出来るものではない。(同上)

人間啄木が一方でその「才」を人に愛されながら、他方でその人間性に不信を招いた様子はよく知られている。その友情は「日本友情史上の模範的行動」¹⁾とまで言われる啄木の最大の理解者宮崎郁雨が、生活力の無い若輩の身で結婚し、子を設けた「無暴さ」や、明日の飯もない中で「平気で詩歌や恋愛を談じ」あるいは、友人の尽力で得た折角の職場を、二週間たらずでサボって平然としている「生活意識の不健全さ」を指摘し、「この様な事態の連続が遂に私を一方に於て彼を敬愛し一方に於て軽蔑する様にしてしまった」²⁾と嘆じている事実は、啄木の人間的な位置を、なによりも端的に説明する。たしかに生活の悪条件が、啄木に不本意な人間関係を強いた事情はよくわかる。彼が生得の理想家であればあるだけ、その欲求や実現を妨げる悪条件が、大きな欠落感や焦心となって、生活の健全な遂行を妨げるといふ事情はあり得ただろう。しかし、郁雨があげているような事実は、あくまでも個人の誠実に関する問題である。この場合「階級制度」や「資本制度」は、彼の「生活意識の不健全さ」と、どれほどのつながりを持ち得るだろうか。この意味で、「革命的詩人」³⁾としてのみ啄木を美化して評価する傾向に反発し、これを「落伍者の文学」としても見得る観点を提出した国崎望久太郎氏の所論には、示唆的なものが多い⁴⁾。氏は、啄木の生涯を通して見られる特徴は「主観的希望と現実との混淆、誇張と衒気にもちた性格」であるといい、これは決して浪漫主義時代のみの特徴ではない、と言っているが、おそらく生前啄木に親近していた人間ならほとんどこの見方を肯定したはずである。

伊藤整氏の有名な「破滅型」文学の定義をここに借りるまでもなく、日本の近代文学に一つの特徴的な図柄として「落伍者の文学」の系譜があることは知られているが、たとえば、昭和の太宰治の生活と文学に啄木のそれを重ね合わせるとき、ぼく達は、意外にその類似点の多いのに気づかされる。その生活的無能力、借金、対人関係、天才意識、空想癖や虚言癖、そして分析的で繊細な自意識など、いろいろあげられる類似がある。しかし、ここでぼく達が考えねばならぬことは、この時代を超えた二つの近代的自意識の類似よりも、逆にその微妙な違いといったものであろう。

ともあれ、啄木の内にあるこの「落伍者」的資質は、当然のことながら、当の啄木自身がすでに自省し、認識しているものであった。何をしても中途半端に終る仕事、誇張された抱負や傑作意識、誠実味に欠ける人間交際、生活的無能力、「私には才がある、悲しい哉才だけがある」という啄木の嘆きは、たとえば、「才あれど徳なし」⁵⁾と周囲に言われた太宰治の性格を、ここでも思い浮かばせるが、その「才」を裏付ける鋭敏繊細な自意識が、己れの性向にある二元的な矛盾を、だれよりも当の本人自身に意識させる。この事情からさらに、天才詩人としての自負と「自分のようなものは死んだ方がいい」⁶⁾という強いコンプレックス、革命を志向しながら、生活を幻像と見る虚無的な眼⁷⁾、労働の充足を喜びながら、一方で安逸を喜ぶ心⁸⁾といった、さまざまな二元撞着が、啄木の生涯の各方向に露出されることになる。このような絶えざる意識の矛盾から排出された彼の「二重生活」観が、単に外界を裁くだけの歯切れの良い論理となり得ないのは当然である。「ああ、頭が少し熱くなって来た。＜二重の生活＞といふものに対する私の此倦厭の

情は、^{はつきり} どうしたら分明と人に解って貰へるだろうか。」という語調の切実さは、それが単純に、時代を批判する論理になりえない、己れの複雑な自意識に対する、彼自身の存在の不安を伝えてくる。こういうことばを吐くとき、彼は果して、社会主義思想が、自分の「明日」を救出してくれることを確信し得たのだろうか。革命詩人、思想家としての啄木を位置づける晩年の『時代閉塞の現状』以下一連の評論活動と『呼子と口笛』中の一群の詩作品、これらの秀抜な作品活動と同時期に、『一握の砂』や『悲しき玩具』などの数多い短歌制作、ローマ字日記などの生々しい生活記録が並存する事情は、あくまでも単純ではない。

註

- 1) 桑原武夫「啄木の日記」(1954岩波版「啄木全集」別巻)
- 2) 宮崎郁雨「私の啄木観—岩城氏の為—」(1955岩城之徳「石川啄木傳」東宝書房中に所収)
- 3) とくに中野重治「啄木に関する断片」(初出1926、「驢馬」)が、「革命的詩人」としての啄木の位置づけに、定説的な説得力を持った。
- 4) 国崎望久太郎「啄木論序説」(1960法律文化社)第一章啄木研究史の瞥見11p. 本文中の説明の外にこんな文章がある。「彼の生活上の不如意と不安の大部分は、啄木の生活者としての欠陥から来ていた。彼は生活上の落伍者であり、その文学は落伍者の文学であったという一面を否定することはできない。落伍者の文学を我々は愛することができる。しかし同時にその全人格をつらぬいている主体性のひ弱さをあわせて指摘する必要はある。」
- 5) 太宰治「東京八景」に、「その頃の文壇は私を指して、才あって徳なし、と評していたが、私自身は徳の芽あれど才なし、であると信じていた」云々とある。
- 6) 「来し方を思えば泣きたくなる。泣けない。私のやうなものは、いっそ死んだほうがよいと思う。」(「一握の砂」明治42.5.7)
- 7) 「君、すべての人はみな生活幻像を描いて、それが幻像にすぎぬといふ事になるべく知らぬふりをして、一生懸命それにすがって生きてゆく。」「僕の個性論も、僕の一元二面観の哲学も、はたまた僕の一切の自負、将来に対する計画も、ついにやはり一種の生活幻像ではあるまいかと疑ふことがたびたびある。人間は本来一人ポッチだ、寂しく心細くてたまらぬから宗教といふ幻像を描いたり、富貴とか権勢とか、名誉の幻像を描いたりする。人生の寂寞、俺は一人ポッチだといふ事を感じたら最後、モウダメだ。虚無！虚無！虚無といふ奴が横平な顔をして我らの前に立つ。」(明治41.2.8宮崎郁雨宛書簡) 通説的には、このような虚無感が自然主義批判や社会主義思想との出会いによって克服されてゆく、という見方が多いが、そういう割り切り方は疑問である。
- 8) 「硝子窓」(明治43.6「新小説」)中に、一生働きづめに働いて、「バタリと死にたい」ということばが出てくるが、すぐその後で「それとはまったく違った気持ちが卒然として起ってくる」と書いている。彼が小市民の安楽を一方で念っていたことは同文中にも、他にも散見される。とくにローマ字日記参照。

3

いま、あらためて、啄木に対する読者のイメージを大づかみに分類すれば、それは浪漫主義詩人から時代変革の志向を持つ革命詩人に発展する啄木と、主にその詩歌を目して彼を感傷詩人と片付ける素朴直截な見方と、さらに近代的自意識の文学としてそれを位置づける三つの観点が考えられる。このうち啄木論の中核をなすのは、すでに何度も言うように、第一の観点だが、いずれにしても、これらの錯綜する観点が、いずれも、彼のある時期の作品に集中した結果の印象であることは、奇妙といえ、奇妙である。そこに革命詩人啄木を見る者は、彼の文学活動中で、その評論、小説、詩に重点を置き、これを感傷詩人、あるいは、自意識の文学と読む者は、主にその詩歌日記を愛好する。中野重治氏によれば、啄木について多くの「曲解者」が生まれた理由はまさに、それが啄木の詩や歌しか読まぬ無知のせいであるが¹⁾、逆も真なりという論法でゆけば啄木の詩歌を軽視することに、別な「曲解」が生じないという保証はない。「その抒情詩的創作活動と全くかわりのない＜革命的詩人＞とは如何なる詩人か」という国崎氏の疑問の生ずる所以である。

明治43年や44年は、啄木が幸徳秋水事件を大きな契機として、『時代閉塞の現状』に集約される、激しく鋭い時代批判による精神の高揚を見せた時期であるが、一方でそれは、「悲しき玩具」であると自卑した歌の形式を彼が最高度に利用しなければならなかった時期であり、また彼の生活の危機的な意識を、最も生々しく露出したローマ字日記の書かれた頃でもある。前者にある充実した精神の形態は、後者では崩壊分裂しようとする自意識の危ういかたちに一転する。いわば前者が彼の意識の陽画とすれば、後者はその陰画である。この陽画と陰画を統一する論理はもちろんあるだろう。具体的にいえばこれを最も手際よく重ねたものの一つに、窪川鶴次郎氏の所論がある。知られるように、啄木は晩年、その短歌を「一生には二度とは返ってこないのちの一秒」を惜しみ、いとしんで、それを現わすには、「形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番便利」だと考えて、これをつくった²⁾。氏はこの短歌観を軸に、たとえばつぎのようにいう。「いのちの一秒」を惜しむ気持は己の無力に対する自覚から己を慰めたり、あるいはその自覚を避けて、その存在をただ生きているという、「生」一般に転嫁して、己れの無力の自覚を回避する卑怯を正当化したりするような、生活感情を意味するものではない。「要するに、啄木にあっては<いのちの一秒>が、一面において根深い生活現実の中から体得されたもので、現実に対して客観性をもった確信にもとづくはげしいリアリスティックな批判精神をともなっていると同時に、他面においては強いられた二重生活の中にこの批判精神が実践的モメントとしての充分な意義もちえぬということのために、<いのちの一秒>が現実からはなれた自我への執着に、おちいらざるをえないことも事実である。」³⁾ (傍点原文)「いのちの一秒」の認識が、啄木の「リアリスティックな批判精神」と同時に、その批判精神がもたらす「二重生活」の認識となって、「現実からはなれた自我への執着」になるという氏の観点は、たしかに啄木に於けるこの時期の陽画と陰画をうまく定着させる。啄木にとって自分が動かし得る現実は、「机の上の置時計や硯箱やインキ壺」と「歌ぐらいなものである」この生活の無力感の痛切な認識は、だからその一方で現代における「家族制度、階級制度、資本制度、知識売買制度」の矛盾を認識させることになる。別な言い方をすれば、短歌にしか自己の「生」の位置の認識を求められず、その必然的な帰結として現実を離れた「自我への執着」がそこに招来されることになる現実の状況が、そこに客観的に反映することになる。氏がこの意味で、啄木における歌の「悲しき玩具」観が、「あくまでも啄木の生活そのものに原因があったので、歌そのものの中にあつたのではない」「つまり啄木の自覚しているかぎりでは<悲しき玩具>とされざるをえないような歌の属性は理解されていなかった」というのは聞くべき意見であろう。かかる意味の歌と、たとえば『時代閉塞の現状』との接点を具体的に氏はつぎのように言う⁴⁾。

啄木は『時代閉塞の現状』においてこの刹那主義とは本質的にことなる見地と方法にたちむかいながら、その刹那主義を支配している自意識は、主観的な自我の孤立化から脱却しようとする要請によってかえって一層うながされる結果となった。一口にいえば啄木の社会主義思想はその反対物である自意識をうながす結果となったといふことができる。

(傍点安東)

一見矛盾する啄木晩年の社会主義と近代主義的傾向は、他方が一方をうながす結果となるという氏の論理で、鮮かに統一される。この意味では一方の見地で、詩や歌が不当に重視されたり、軽視されたりするという偏向や、図式的な啄木理解は、かなりの意味で免れることができるだろう。しかし、問題をとくに啄木の複雑な近代的自意識において見るとき、歌をつくらざるをえない生活の条件のみが、彼の自意識を「うながす結果になった」という視点でいま納得してしまう

には、まだなにか不十分なものを感じる。「正直に言へば歌なんか作らなくてもよいやうな人になりたい⁵⁾」という啄木のことばを窪川氏はひいて、「ほかには求めることができなくて<自己>を意識するために歌をつくるという意味で、<歌を作る日は不幸な日だ>の一句は、社会主義と近代主義との結びつきの、端的な告白を聞くことができるであろう⁶⁾」と言っているが、あえて言えば、「歌なん作らなくてもよいやうな人」と「歌なん作らなくてもよいやうな生活」とは微妙に意味が違うであろう。啄木がここで「人」ということばを使っていることに、私なりの意味を感じたい。氏がここから社会主義と近代主義の結びつきを見ることには十分の理由がある。ただ、歌をつくる啄木の自意識には、どこかで社会主義を超えているものがあるのではないか、というのが当面私の考えたいことである。

註

- 1) 中野重治「啄木に関する断片」(前出)
- 2) 「一利己主義者と友人の対話」(明治43.11「創作」第一巻第九号)
- 3) 窪川鶴次郎「石川啄木」(1957.2「五月書房」)歌人啄木—137P
- 4) 〃 「啄木の短歌」—近代主義と短歌主義—(1956.11「文芸」石川啄木読本)19P
- 5) 明治44年1月9日瀧川深宛書簡
- 6) 窪川鶴次郎「啄木の短歌」(前出)

4

啄木を歌や日記に執着させたものは、たしかに彼の生活である。しかし、この意味の生活とは広い、持続的な意味のものでなければならぬ。たとえば、啄木の社会主義思想が、彼の自意識を一層うながす結果となった、とそれをとらえるとき、彼の歌や自意識は、いささかその社会主義思想との関連に於て限定づけられすぎてしまう印象をぬぐうことができない。なるほどこの時期において、外へ向う啄木の理想や、社会革新への情熱は、それ故に自己の生の無力感を彼に意識づけ、それと背反的な自我への執着を強めたということは言い得るであろう。だがこれは、その原因のすべてを説明する結果ではない。逆に彼の相剋する自意識が、一方で社会主義を発見し他方で、実行家としての無力感を彼にもたらしたという言い方が可能なはずである。

『悲しき玩具』や『一握の砂』に於て、諸家がとくにあげる彼の歌の特徴に、静照的、という印象がある。斎藤三郎氏の『文献石川啄木』¹⁾には、当時の有名無名諸氏の、啄木短歌観が集録されているが、その多くが、現実を静照的に把握する彼の歌の魅力をあげている。中でも伊藤佐千夫は、『悲しき玩具』の読後感として、啄木は「酔えない」歌人であったという印象を述べている²⁾。「酔えない歌人」、別な意味でいえばそこにリアリスト啄木というイメージが付随してくるが、リアリストという意味よりも、そこに近代的自意識家の特徴を見る方が、もっと実状に即しているようだ。この点で、啄木の強烈な自意識に徹底して目を当てた福田恆存氏の啄木短歌観は示唆的である。たとえば氏はこんな言い方をしている。

いかに絶望的な生活のさなかにあろうとも、またどんな混乱と激情に身をゆだねていようとも、強烈な意識家啄木のなかにはつねに不動の、冷たく澄みわたった層がある。その透明な意識のガラスは、前途を黒々とぬりこめられたいまとなってみれば、たゞ鏡となって過去の劇的な一瞬一瞬を映しださずにはいなかったのであろう³⁾。

氏は、啄木の歌に「つねに自己の一挙手一投足の背後をじっと見まもっていた意識家の面目」を見出し、同時に啄木の本質をナルシズムと規定する。この意味で、氏は『一握の砂』に於ける「我を愛する歌」にこの歌集の中核を見ている。この見方を押せば、啄木に歌を必要とさせるも

のはあくまでも、彼のナルシズムであり、その自己を見守る「意識家」の眼である。社会主義思想はそういう自意識を緊張させる一媒介物ということになろう。たしかに、啄木のなかには「つねに不動の澄みわたった層」があると、私も思う。この「層」は、その意識の濃淡にかかわらず、すでに浪漫主義の詩人時代から、啄木に固有のものであったと私は考える。この意味でも私は、彼の最晩年の苦境時、その「悲しき玩具」であった彼の歌の数々の中に散見される一種特有のユーモア、またはアイロニーといったものに注目したい。

家を出て五町ばかりは、
用のある人のごとくに
歩いてみたれど一

考へれば、
ほんとに欲しと思ふこと有るやうで無し。
煙管^{きせる}をみがく。

腹の底より欠伸もよほし
ながながと欠伸してみぬ、
今年の元旦

世におこなひがたき事のみ考へる
われの頭よ！
今年もしかるか。

すっぱりと蒲団をかぶり、
足をちぢめ、
舌を出してみぬ、誰にともしに。

眠られぬ癖のかなしさよ！
すこしでも
眠気がさせば、うろたへて寝る。

そうれみろ、
あの人も子をこしらへたと、
何か気の済む心地^{こころ}にて寝る。

紙幅の都合で上例にとどめたが、ここには、気負いたった啄木の姿も、惨めな二重生活に辛苦する深刻な詠嘆もない。どんな深刻な生活でも、その地点から一步離れてみれば、人間の姿はつねに喜劇的である。その喜劇性の認識は、その生活の渦中から自己の姿をすくいとってくる意識家の眼を通してはじめて明晰に獲得される。これらの歌の背後に、一步心の操作を誤まればそれがたちまち深刻な詠嘆や哀傷の歌になる生活が隠されていることは、この時期の彼の生活を知らば知るほど明らかである。だが、「酔えない」歌人啄木は、どんな苦しい、深刻な場面でも、自己の分析的な自意識を通さないでは、己れの存在を「確認」することはできない。意識家のナル

シスムは、自己の泣顔さえ、鏡に写してつくづくとそれを眺めることを己れに求めるのである。一方でこの自意識の鋭敏が、彼の二重生活の矛盾や撞着を、そのアイロニーやユーモアで救出することを彼自身に教える。彼に二重生活の矛盾を深刻にもたらした当の自意識が、一方で、この矛盾を冷静に観察し、アイロニーを以て、その存在を統一調和することを彼に教えるのである。ここにあるユーモアは、いわば彼の苦渋な自意識の救済の手段であり、ともすれば惨めな現実の中に紛失されようとする自意識の客観化の方法である。『一握の砂』よりもさらに「二重生活」の矛盾の落差の甚しい『悲しき玩具』中の歌に、より多くユーモア、アイロニーの調子が散見される理由もここにある。もちろんこのような意識の客観化を彼に強いるのは、他になにをするすべも許さない、閉塞した生活である。が、それ故にこそ、自己の意識の深部を凝視しようという意識家の面目が、そういうかたちで、生彩[?]を發揮するのである。

病氣と貧困に追いつめられた彼の最晩年よりも、ある意味では彼の精神の最も暗い時期をぼくたちに教える『ローマ字日記』にも、時にはポッカリとユーモアの調子があらわれる。たとえばドナルド・キーン氏が指摘するようなつぎの箇所⁴⁾

『僕は東京のおばあさんが嫌ひですネ』と予は言った。『何故です?』『見ると感じが悪いんです。どうも気持が悪い。田舎のおばあさんの様に、おばあさんらしいところがない。』その時一人のおばあさんは、黒眼鏡の中から予を睨んで居た。あたりの人達も予の方を注意して居る。予は何となく愉快を覚えた。
(42・4・8)

帰りに小便が出たくなったが便所が無い。池田座の前に「竹内一郎一座」の幟が立って居たので、一計を案じ出し、『竹内君が居るか』と云って入って行って小便して出た。

(41・4・10)

4月26日の日記には、朝から憂鬱なことがあって彼は死を考える。死のうか死ぬまいか、と深刻に思いつめているうちにふと湯に行こうという気になる。湯につかっていると気持がほぐれてくる。「湯の中は気持がいい。出ようか出まいかと考えていると一死のうか死ぬまいかという問題が、出ようか出まいかの問題に移って、ここに予の心理状態が変化した。」と彼は書いている。だがまた、その同じ日の日記の後には「自意識は、予の心を深い深いところへつれ行く。予はその恐ろしい深みへ沈んで行きたくなかった。」という自意識の不安が語られる。死にのめりこんでゆきそうになる自分もたしかなら、湯に入ってその想念がいっぺんに軽くなるのも本当である。逆にいえば、変転する自意識にとって、なにが信ずるに足る不動の想念や意志たり得るか。生活の悪条件が彼の自意識に死をささやくのが不安なのではない。彼は死のうとしても死ねない自分を知っている。だがまた死ねないはずの自分を突然死に誘うものが、自意識の気まぐれであることも彼は知っている。彼が恐れるのは、このような自意識の極限状況である。いいかえれば、自分が自分でなくなることが、彼の最大の不安なのだ。ユーモアや自嘲はこのときなによりも、彼の錯綜する自意識のための最良の中和剤にはかならぬ。

桑原武夫氏は、『ローマ字日記』のライトモチーフは「自由」と「自意識」の二元の対立相剋にあるといい、これは彼の生活と文学の実験であり、彼の全要素を含む日本近代文学中の「最高傑作」の一つに数えられるといい⁵⁾、ドナルド・キーン氏も、ここには啄木のどの作品にも増して、複雑で立体的な人間の反映がある、とその高い文学性を認めている⁶⁾。彼が自己の文学の最大目標とした小説などでは断片的にしか現われぬ彼の自意識のさまざまなかたちが、たしかにこの危機的な生活状況の中で、ローマ字日記という特殊な形態を借りて、その独特な魅力と深さを獲得したということは示唆的である。この啄木に於ける本質的な世界の原像を、彼の自我意識

の分裂した世界の極限とみ、やがてこの分裂の統一される時が「時代閉塞の現状」である、という図式的に明確な把握の仕方は、やはり問題がある。たとえば相馬庸郎氏の次のような言い方。「そこでは、自我意識・感情が八方ふさがりの元凶をつきとめ、その元凶＝国家の＜強権＞に積極的に宣戦する。そしてそのことによって、二つのポールは今迄の遠心力的關係から求心力的關係に転じ、主体は一方の方向に統一されるのである。」⁷⁾

だが「二つのポール」は、そんな具合にうまく「統一され」たはずはない。それとほぼ同じ時期に、異常なほどの短歌がつくられ、それらの歌群の中に、『ローマ字日記』の複雑な自意識があらためて表現の場を求めている事情は、すでに不十分ながらぼく達の考察してきた通りである。「時代を閉塞の現状において把握したことは 同時にかれの主体が閉塞状態にあったことの返照である。」⁸⁾「その＜閉塞＞されている主体の内部の光景をわれわれは『一握の砂』にみる。さらに『悲しき玩具』にみる。それは統一的視点によって再把握されつつある主体の状況とは何のかかわりもない。むしろ分裂は進み矛盾は一層深刻になっている。」⁹⁾ という国崎望久太郎氏の観点は、啄木の複雑な自意識を、晩年の社会主義思想に統一づける在来の図式的な論理よりも、はるかに論理的、現実的な根拠を持っていることを、ぼく達はあらためて確認すべきであろう。

註

- 1) 斎藤三郎「純文献石川啄木」(1942「青磁社」)参照
- 2) 伊藤佐千夫『『悲しき玩具』を読む』初出は「アララギ」5巻8号(明治45.8)のものだが、ここでは上記「文献石川啄木」所収(244P)のものを参照した。
- 3) 福田恒存「石川啄木」(1952角川書店「作家論」30P所収)
- 4) ドナルド・キーン「啄木の日記と芸術」(1956「文芸」石川啄木読本)28P
- 5) 桑原武夫「啄木の日記」(前出)
- 6) ドナルド・キーン「啄木の日記と芸術」(前出)
- 7) 相馬庸郎「ローマ字日記について」—啄木ノート—初出1964・2「日本文学」ここでは(筑摩書房「啄木全集」第八巻)261P
- 8) 国崎望久太郎「啄木における短歌と詩の問題」(初出1966・1「国文学」ここでは筑摩書房「啄木全集」第八巻)253P

5

さて、そろそろこの小論のまとめを書かねばならぬ。相馬庸郎氏は、前記の文章の中で、啄木の『ローマ字日記』には、つねに how という問いかけが目につき、why という問いかけが、極めて影が薄いという特徴に論及している。この観点を私は興味深く考える。氏はこれについて、この期の啄木の自意識は、「息をきらしながらひたすらに前に向かって進もうとしていたのだ」¹⁰⁾と解き、それは反省の時期というより、行動の時期だった、と説明している。それを行動ということばで現わして適切なものかどうか疑問とするところもあるが、how 的な問いかけ、つまり、いかにして生きるか、という意識が、とくに彼の生活の閉塞状況の中で特徴的に現われてくるのはその通りだと思う。

読む、書く、という外に、何か私のすることがあるか？それはわからない。が、とにかく何かをしなければならぬような気がして、どんな呑気なことを考えている時でも、しよっちゆう後ろから「何か」に追っかけられているような気持だ。(42・4・10)

戦わずにはいられぬ、然し勝つことは出来ぬ。然らば死ぬ外に道はない。然し死ぬのは厭だ。死にたくない！然らはどうして生きる？ (同 上)

実際予は何をすればよいのだ？ 予のすることは何かあるだろうか？ (42・4・17)

しかし、このような how 的問いかけは、実の所『ローマ字日記』だけの特徴ではない。いかに生きるか、何をすべきかという焦燥は、彼の生得のものであり、それを端的に語るのは『性急な思想』(明治43・2・13)というエッセイである。彼はここで、「近代的」ということばの意味は「性急なる」という事に過ぎない、といい、「近代の人間の特質」は神経が鋭敏になっていることだ、という。彼はそういう性急さを近代人にもたらしたものは「最近数年間の文壇及び思想界の動乱」であったと指摘し、「性急な心は目的を失った心である。」「危い事此上もない」と断じている。彼はこの意味の「二重生活」を克服するために、非近代的であらねばならぬ、と主張するが、すでに見てきたように、かかる「性急な思想」のもたらす自己破産の危機は、彼自身に於ける切実な問題でもあった。彼がここに、明治末年の時代の弊を見ているのは正当にして鋭い。いかに生きるか、how to live という問題は、言ってしまうと、明治一般の意識であり、問題であった。個人の利益と国益が幸運に一致しえた明治初年代から、実利的思想の疑問の上に、新しく人間や生活復権の意味を問いたす明治後半の思想的傾向も、目まぐるしく移入され、急テンポで展開する近代的な生活や思想の消化吸収に、とりあえず、いかに生きるかという手段の工夫に追われ、なぜ生きるのか、why や what という存在への問いかけを十分に追求する契機をつかみかねる。ここに生じる近代的自意識の不安を最も適確深刻に表現するのは、夏目漱石の文学である。

『現代日本の開化』や『それから』の文明批判は、外発化に追われ、内発的な秩序や過程を欠いた明治文明の異常発展の矛盾を端的に暴露する。同時にこの時代批判は、やがてその場に生きねばならぬ、自意識の不安として、いわば個我の位置感の不安として自己の内部の世界に問題を掘り下げてゆく。具体的にいえば、『現代日本の開化』の文明批判は、『私の個人主義』における「何かをしたいが、何をしたいかわからない」という存在の霧の中で、自己の生の位置を模索する自意識の不安の中に、彼の文学の主題を求めてゆくのである。ぼく達はこの意味で、『行人』に於ける主人公一郎の、自己一身の中で、幾世紀という時間の進歩をいっぺんに経過させねばならぬ自意識の不安と、その自意識の鋭敏さゆえに、他との連帯を見失わねばならぬ存在の孤独をここで思い出しぬわけにはゆかない。ここにあるのもいわば、how という問いかけのみに終始して、たとえば、what we living for という存在の問題を欠落してきた、明治的近代の鋭敏深刻な自覚である。

考えねばならぬことは、このような近代批判と、近代的な自意識の不安との相関的な関係である。「明治末年の日本社会が閉塞状態にあるという鋭い解析力は、かれの主体の閉塞されているという自意識に根拠をもってゐた。」²⁾ という啄木についての指摘は、ほぼ同じ意味で、漱石の場合にも符合するはずである。漱石に、神経衰弱や狂気をもたらす存在の条件がなかったら、彼の「内にとぐるを巻くような」³⁾ 執拗不安な自意識の深刻がなかったら、彼の適確鋭利な文明批判はありえただろうか。いわば、「いかに生きべきか」という問いかけに終始追われつづける焦燥と不安が、近代への疑問を同時に内在する事情がここにも語られているのではないか。

『現代日本の開化』や『それから』『野分』などにおいて、漱石は、自己の内にある近代批判の思想的統一点をたしかに見出しただろう。しかし、彼の文学はこの方向で、その複雑な自意識を統一することはできなかった。彼にとって問題はむしろ、このような時代の病弊を痛感せしめる己れの自意識の不安にある。how と問いかけ why を欠落した外発的な明治文化の悲劇は、まずなによりも、その悲劇に堪えねばならぬ自意識の苦痛として、彼の存在を脅かすのだ。

漱石よりもはるかに貧窮した生活を送らねばならなかった啄木は、その意味では漱石よりもっと単純確信的に、社会主義思想に出会い、その「二重生活」を統一する論理を見出したことは一応言い得るであろう。しかし、「家族制度」や「階級制度」のみが、彼の自意識の不安の根源をなしていたのではない。問題はむしろ逆に、「何かをしなければならぬ」性急な自意識が、閉塞された出口のない状況の中で、それらの問題を必然的に発見せしめたのである。あえていえば社会主義思想も、彼の分裂しようとする自意識を統一するための一方便ではなかったか。これは彼の『時代閉塞の現状』やそれに関する一連の発表や行動の意義を否定するものではない。漱石の文明批判が、今日も持ち得るそのすぐれた歴史性と同様に、啄木のこれらの一連の評論の、時代に占める意味はあくまでも秀抜である。しかし、問題を啄木の生や文学に置いてみると、いわゆる「整った頭、取りも直さず乱れた心」⁴⁾の状況は、この時代に生きる鋭敏な自意識の逢着すべき共通の運命であった。時代を批判する鋭利な眼は、それを己れの存在に向けるとき、「要するに僕は人間全体の不安を、自分一人に集めて、そのまた不安を、一刻一分の短時間に煮詰めた恐ろしさを経験してゐる」⁵⁾という鋭敏な自意識の不安と孤独に当面せざるをえない。僕の思想は時代より一步進んでいると啄木は考えたが、それは果して思想の問題であったか、彼の人に先じた近代的自意識の問題であったか。

かってワグネルの思想に一面二元観の哲学を見た浪漫主義詩人の啄木は、「硝子窓」の中では「文学」と「実人生」の間隔を承認する自然主義批判者として、やがてその間隔を埋めるべく、社会主義思想に、思想と生活の統一点を見出そうとするが、すでに見てきたように、その一方で『一握の砂』や『悲しき玩具』における憑かれたような歌作に、分裂しようとする自意識の統一平衡を求めねばならなくなる。「惨ましき二重生活」は彼の生涯の問題であった。「自己の範囲というもの、知れば知る程小さくなってゆく。常に何らかの努力をせねばならぬ人間の運命を私はしみじみと痛ましく思ふ」⁶⁾とつぶやきながら、一方死の直前まで、『樹木と果実』の発行に執心する啄木の生の位置は、単に「革命的詩人」としてのみでなく、もっとも近代的な自意識の文学の問題として、以後の文学史にその意味をひきつがれねばならぬはずだと、私は考える。

註

- 1) 「ローマ字日記」明治42.4.25参照。
- 2) 国崎望久太郎「啄木における短歌と詩の問題」(前出)
- 3) 具体的には「彼岸過迄」における主人公須永の性格の説明として出てくる。
- 4) } いずれも、夏目漱石「行人」第四章「塵勞」中の一郎とHさんの対話の中に出てくる。
- 5) }
- 6) 「無題」(執筆年月不詳)前後の事情より、明治43年以降の執筆と思われる。

付記；引用文献中の年月日は原則として西暦を使ったが、啄木のものに関するかぎり、時代状況を明らかにする意味で、年号を使用した。(安東)